

言語と文化の統合される地平

言語教育における言語文化

三代 純平

1. はじめに
2. ラングとパロール 私のことばの生まれる場所
3. 「集団の文化」と「個の文化」
4. 言語と文化の統合される地平 言語教育における言語文化
5. 結論

1. はじめに

「集団の文化」には実体がないという理由において、それを幻想だとし、それに対するものとして「個の文化」というものを打ち出した細川（1999,2002）は鮮烈な印象を与えた。それに触発されるように、私も稚拙ながら私なりに「個の文化」という考えについてまとめてみた（2002）。だが、執筆中に、常に疑問に感じていたことがあった。幻想ということと「ない」ということの間には何か隔たりがあるのではないだろうか。幻想として存在するというものもあるのではないだろうか。

そのような自分の疑問に答えるべく、ここでは、集団と個というものを、ひとつの切り離せない存在と位置づけることから始めてみたい。そして、その先で、言語文化とは何か、また言語学習において言語文化をどのように考えられるかということについて述べていきたいと思う。

2 . ラングとパロール 私のことばの生まれる場所

私のことばは本当に私のことばなのだろうか。そういう思いにとりつかれる瞬間がある。自分のことばを聞きながら、そのことばをどこかの本で読んだような気がする。だが考えてみると、自分の使用している「日本語」と呼ばれている言語自体、私は他者から与えられた。そういう意味においては私のことばではない。「日本語」は私が生まれる以前から存在したのである。私は他者から与えられたことばで思考しているのだ。

だが、同時に、私と同じことばを話す人間はいない。音声学的に厳密な意味で私と同じ音で「言語」などという人間は存在しないし、厳密に同じ意味で「文化」を語る人間もいない。

ここで、ラングとパロールのことが思い出される。ソシュールは言語のもっている法則性、体系をラングと名づけ、一方で、個人の発話をパロールと呼んだ。だが、ここでは集団と個人の関係について考え易いように、便宜上、体系としての言語をラング、発話に関わらず、個人の使用する言語をパロールと呼ぶことにする。

まず、問題となるのが、ラングとは何か、ということである。たとえば、「日本語」の体系と言ったところで、何を持って「日本語」とするかは定かではない。田中克彦（1981）が指摘するように、一つの言語を他の言語と区切るものは体系よりも、むしろ、政治的要因である場合が多い。それは沖縄方言と東京方言の違いが、スペイン語とポルトガル語の違いより大きいという事実を見ても明らかである。

だが、同時に言語がある一定の法則を持っているのも事実である。もしその法則を失えば、私たちは互いに言語によってコミュニケーションを行えなくなるであろう。丸山圭三郎（1984）が主張するように、言語の体系というものは、個々の集合ではなく、全体における意味の差異の関係である。たとえば、「弟」という概念があり、「兄」という概念が別にあるのではなく、「弟」という概念は「兄」という概念など、他の概念との差異においてのみ、存在しうるのだ。つまり、全体の存在なしに、個の存在はありえないのである。この発想は、一見、細川の「個の文化」の思想と激しく対立する。なぜなら、細川は『日本語教育は何をめざすか』（2002）において次のような図を示しているからである¹。

個人 < 家族 < 地域 < 組織 < 民族 < 国家 < 地球

¹ 細川英雄（2002）p.136

この図は全体の地球というものが個によって構成されていることを示している。また、逆に言えば、全体は個のレベルまで、細分化できることを示している図である。細川の立場では、始まりに個があり、そして、個のネットワークが全体を形作るのである。この点において、丸山のまず全体ありきの発想とは対極にあるといえるだろう。さらに、丸山は「関係の世界においては個は存在し得ないのである」²とも述べている。意味は他の意味との差異によってしか現れない。とするならば、独立した個などというものはなく、そこにあるのは関係性だけだということである。

だが、この「個」を否定するかのような、関係性という発想に実は「個」を捉えなおす鍵があるのではないかと私は思う。ラングは体系である。そして、そのラングなくしてパロールは存在し得ない。その意味ではあたかも、全体が先に存在するかのようだ。また、個人が集まって、そこに言語が生まれた、と考えるならば、パロールというものがラングに先行するかのようにも見える。しかし、ラングというものが関係の総体ならば、パロール(個人の言葉)が関係を支えている。ラングの存在なしに、パロールもないが、ラングもパロールの存在なしにはありえないのである。よって、ラングとパロールは相互依存的に存在し、片方の存在なしには、一方も消えてしまうのである。だから、全体か、個かではなく、全体の中で個が関係において存在するのと同様に、全体と個もその関係においてのみ存在しうるのである。

ただし、全体と個の関係は相互依存的であると同時に、相互否定的に存在するというパラドクスが次にある。全体はけして確固たる実体を持った体系ではない。個人の言語使用により、絶えず、変化し続ける流動的なものである。パロールはラングの存在なくして、コミュニケーションの機能を果たしえないが、同時に、パロールはその使用において、ラングを変化させる。なぜなら、個人の言語としてのパロールは、独自の関係性の中で、独自の体系を持っているからである。そして、その独自の体系はラングというさらに大きな体系に支えられることによって存在しているのにも関わらず、そのラングを絶えず突き動かしている。ラングはその担い手なしには存在しないのであるから、パロールによって変化させられることによってのみ生きながらえることができるというよいだろう。そこには一つの往還関係がある。人はラングの影響下に生まれ、ことばを学び、パロールとしてのことばを用いることによって、ラングを変化させる。また、ラングの影響により、自らのパロールを変化させる。そして、再び、パロールとしてのことばを話す。この繰り返しである。これがラングとパロールの相互依存と相互否定の

² 丸山圭三郎(1984) p.196

パラドクスである。

そして、私のことばはこのパラドクスの中に存在する。私のことばは、ラングに、そしてそのラングを共有している他者のパロールによって規定されていく。しかし、私を規定していくラングと、そして他者のパロールとの関わり方は私だけのものであり、ことばはコンテクストにおいて初めて意味を規定されるのだとしたら、そのコンテクストは私だけのものである。私のことばは、他者から与えられたことばかもしれない。しかし、その使用のコンテクストにおいて、私だけの意味を持つだろう。それはまたラングへと吸収されていくが、再び私が、ことばを用いるときは、やはり私だけの意味で用いる。その繰り返しである。この絶えないラングとパロールの往還関係が私のことばが生まれる場である。

以上のように、全体が先か、個が先か、ではなく、二つは常にともに在るという視点が重要である。そして、集団の言語体系としてのラングと、個人の中にある言語体系としてパロールは互いに依存しあい、否定しあうことで常に流動的に変化しながら、存在しているということができるだろう。この全体と個の往還関係の中で、私のことばは生まれるのである。次に、このラングとパロールの関係を基に「集団の文化」と「個の文化」について考察する。

3. 「集団の文化」と「個の文化」

しばしばことばが文化のアナロジーで語られるように、先に見たラングとパロールの関係の類推において「集団の文化」と「個の文化」について考えることは無駄ではないだろう。だが、まずここで、「文化」という概念をどのようにここで捉えるかを定めたい。細川（2002）は「文化をどう見るかは研究者の研究戦略の問題であり、そこに定まった固定化したルールがあるわけではない」³とした上で、自分の「文化」に対する立場を確立することの必要性を主張している。私はここで「文化」を精神活動、そしてその表現であると捉えたい。文化はしばしば、文学や芸術などの高尚文化（C文化）と日常生活文化（c文化）などという分類をされるが、何を持って高尚とするかは不明瞭であるし、生活習慣もある特定の地域で明確に境界を引くことを拒否する多様性を見せている。よって、C文化、c文化などの分類は説得力を欠いている。だが、その二つの

³ 細川英雄（2002）p.165

文化の根底に共通してあるのは、それが精神活動だということである。芸術は芸術家の精神を表現したものといえることができる。また生活習慣もその表現者の精神を反映しているとは考えられないだろうか。待遇表現、食生活など必ず、その実行者と精神と関わりを持つであろう。以上が、私が文化を前記のように捉える理由である。

この観点において「集団の文化」、「個の文化」というものについて考えていく。最初に「集団の文化」であるが、これはラング以上に実体がないものである。よって、これが「日本文化」である、という形で提示することは非常に難しい。だが、同時に、各地に存在する風習や、習慣、言語、または政治機構として、何かしら共有されているものがあることも看過できない事実である。細川（2002）は、「その「文化」表象としてのモノ・コト・ヒトを見たとき、それぞれの個人の中に生まれる認識が「文化」認識である」⁴というように、文化は個人の中にあることを主張し、その理由として、「文化」は個人によってしか、認識、解釈できないということを挙げている。確かに、個人の認識、解釈を通さないで表出する文化事象などというものが存在するはずがない。

だが、だからといって、「文化は個人の中にある」というだけで本当に問題は解決されるのだろうか。個人の認識、解釈の中にしか「文化」は存在しないというが、それは「文化」に限ったことではない。竹田青嗣によるとニーチェの有名なことばに「事実なるものはない、ただ解釈だけがある」⁵というのがあるそうだが、たとえば、「えんぴつ」でさえ、解釈の中にしか存在しえないのだ。私がこのように述べると、ある人は「それは次元が違う。えんぴつは確かにあるじゃないか」と反論するかもしれない。だが、「えんぴつ」がある、ということ自体がすでに解釈によるものなのである。私たちはことばによって世界を分節することで物事を認識する。「えんぴつ」という概念なしに、それを「えんぴつ」と認識することはないだろう。その意味においては、すべてが個人の中にあるのである。それはけして、「文化」に限ったことではない。

ただここで問題となるのは、なぜ私たちはこれを「えんぴつ」として認識するのか、「文化」と認識するのか、ということである。私たちの認識や、解釈はどこから来たのか、という問題がここには存在する。おそらく細川はここで個と個のネットワークというものを持ち出すであろう。個人間の対話の中において、個人の認識は形成されていく、と。確かに、人と人が集まり、共生する過程を経て習慣や言語を徐々に形を作っていくということは推測される。だが、私たちが生まれるとき、風習、言語は流動的で固定的な実体は持っていないにしろ、既成のものとして存在している。最初は個と個のネッ

⁴ 細川英雄（2002）p.172

⁵ 竹田青嗣（1994）p.114

トワークを通して形成されたものかもしれないが、それは共有され、社会コードとして記号化されることにより、はじめて風習となり、言語となるのである。それは実体を持たないが、あるコミュニティ内の人間にとって、共有されている、いわば、共同幻想のようなものである。この共同幻想として「集団の文化」というものは私たちの認識に少なからず、影響を与えていると思われる。

では、「個の文化」はその「集団の文化」の影響下で形成されるだけの存在なのだろうか。もちろんそうではない。ここでラングとパロールと同じような関係が見られる。ラングはパロールという形で個人に行使されることによるのみ存在し、また同時にその存在を変化させられる。同様の事がここでも起こっている。個人が「集団の文化」を解釈していくことにより共同幻想としての「集団の文化」は存在する。たとえば、「えんぴつ」というもの一つの文化的存在だと捉えられるが、その「えんぴつ」を記述する道具とする「集団の文化」はそれを認識する個人によって支えられているわけである。当然のことではあるが、もしそこに認識する個が存在しなければ、「えんぴつ」があるかどうかさえもわからないし、使う主体を欠いた「えんぴつ」はもはや「えんぴつ」としての意味を持ち得ない。だが、個はその解釈を通じて、「えんぴつ」を個別の意味を持った「えんぴつ」にしていく。書く道具としての「えんぴつ」という意味では共通しても、その「えんぴつ」が個人に対してもちえる意味はまさに個別である。ある人はその「えんぴつ」をきれいだと思い、他の人は、その「えんぴつ」で大切な人を思い出すかもしれない。つまり、「集団の文化」は個人に解釈されることを通じて「個の文化」となることによるのみ、存続を可能にするが、「個の文化」は「集団の文化」とけして一致はしないのである。

個別の解釈によって個別の様相を呈する「集団の文化」というものはそのような意味では共同幻想として共有されているという幻想、二重の幻想性の上にあるものかもしれない。しかし、幻想だから、意味がない、存在しない、などと言い切ることはできないのではないだろうか。その共同幻想としての文化環境で生きることを余儀なくされている私たちの個の認識は「集団の文化」というものから絶えず影響を受けている。そして、逆に「集団の文化」という共同幻想を解釈していく過程において、私たちは「個の文化」、固有の価値観や解釈を育み、それを外言化していく過程で「集団の文化」を絶えず変容させている。

ここにラングとパロールのパラドクスと同様な構造を見出すことは容易である。「集団の文化」という環境に生まれた個人はその影響を受けつつ自己の中に「個の文化」というものを培う。そして、その個の認識のあり方、精神活動としての「個の文化」を表

現していくことで、「集団の文化」は絶えず流動的に変化し続ける。そして、その共同幻想としての「集団の文化」は再び、「個の文化」に影響を与える。この往還関係の中でのみ、個人は形成されていく。よって、私の文化というものがあるとするならば、それは、「集団の文化」それは実体を持たず流動的なものであるがとの往還関係において絶えず変容を迫られ、また同時に変容を迫っているものである。

4 . 言語と文化の統合される地平 言語教育における言語文化

これまでラングとパロール、「集団の文化」、「個の文化」というものをどちらが大切か、またどちらがより真実に近いかなどという二項対立ではなく、相互依存的、かつ相互否定的というパラドクスの中で切っても切れないものとして存在しているということを見てきた。では、その言語と文化はどのような地平において統合されるのかについて次に考察を加えていきたい。

ことばは文化の代表的な側面である、ということばをしばしば耳にする。だが、人がことばを通じて物事を認識しているとしたら、精神活動である「文化」はことばの側面であるということもできるかもしれない。つまり、ことばと文化というものは元来、共起するものなのだ。ことばは常に認識とともにあるのだから。そのことばと文化を切り離して教えようとしてきた言語教育の誤りは細川がしばしば批判してきたとおりである。

ことばを語る時、そこには一つの認識が、そしてその認識の表現がある。それこそが「文化」である。ならば、私たちが他者とのコミュニケーションを図ろうとするその瞬間こそが、ことばと文化が統合されている地平ということができないのではないだろうか。なぜなら、他者に自分の思考を伝えるべくことばを紡ぎだすことからコミュニケーションは始まるのだから。ことばを紡ぎだそうとするその瞬間、ことばとともにある認識、つまり「文化」も生まれるのである。コミュニケーションの場に現れることばはパロールであり、文化は「個の文化」である。だが、それは、ラングと「集団の文化」の影響下で生まれ、かつそれを突き崩していくエネルギーを持ったものであることを忘れてはならない。

異なる言語を習得する、話すということは、自分の中に他のラング、他の「集団の文化」というものを取り込むことである。同時に、他のラング、そして自分が以前から影

響を受けていたラング、他の「集団の文化」、そして自分が以前から影響を受けていた「集団の文化」を突き動かしていく原動力となるはずである。たとえば、「日本語」を母語話者とする人間が「韓国語」を習得し、「韓国語」でコミュニケーションを行うということは自分の中にある「個の文化」が影響を受けるだけではなく、「韓国語」というラングに、また「集団の文化」に影響を与えていくはずなのである。なぜなら、そこには常にラングとパロール、「個の文化」と「集団の文化」の往還関係があるのだから。そして、そこで新しく手に入れた「個の文化」を基に、その人が「日本語」を話すとき、「日本語」というラング、「集団の文化」も変容を余儀なくされる。そして、こういったことは英語の世界的な普及とその多様化を見ると明らかなように、常に現在起こっている現象なのである（今更、シンガポールの英語、「シングリッシュ」やピジン英語を具体例として検証する必要は無いだろう）。だからこそ、言語と文化の境界は曖昧であるし、言語、文化を画一的に切り取って定義することは不可能なのだ。

この観点に立つと、何か一つの正しい「ラング」を個人に教えること、何か画一的な「集団の文化」に個人を適応させることがいかに無意味かということがわかる。ラングはパロールによってその存在を可能にされ、同時に変化させられる。「集団の文化」も同様である。ゆえに流動的であるそれらに個人を適応させていくことはできない。

では、言語教育において何ができるだろうか。新しい言語を習得するということは新しいラングを自らのうちに取り込むことだと先に述べた。しかし、ラングとは、普遍的な固定された体系を有してはいないと述べた。では、いかにしてラングを取り込むのか。それは他者のパロールを通してである。他者のパロール、「個の文化」とのインターアクションにおいて始めて、学習者は目標言語を獲得できる。よって、言語学習では、異なる「集団の文化」を背景にもつ他者とのコミュニケーション能力を養うことが重要になってくるであろう。コミュニケーションというものを、自己の認識を語り、相手の認識を聞き、それによって自らの中にある認識を変容し、さらに、再び自らを語るという一連のサイクルと捉えるならば、コミュニケーション能力の育成とは、「個の文化」を語らせることによってこそ培われる。そして、まさに、「個の文化」を語らせるときに言語と文化の統合はなされるのである。

よって、言語や文化を学ぶということは、ラングや「集団の文化」を現前と存在する実体のあるものとして学ぶということではなく、パロールや「個の文化」を通して、獲得していくものなのである。そしてその獲得の過程において、そのラングや「集団の文化」と自らのパロール、「個の文化」の間に関係を取り結んで相互に影響を与え合っていくのだ。

ただし、その際に「個の文化」というものが「集団の文化」の影響下で形成されているということを忘れ去るべきではないだろう。このことは「個の文化」は「集団の文化」の影響下にあるのだから、「集団の文化」を知識として知らなければいけないということを意味しない。繰り返し述べるように「集団の文化」は流動的なものである。肝心なことは「個の文化」というものを他者に語ることを通して、常に、自分の「個の文化」がどのような影響によって形成されているのかということに自覚的になることである。自分とは違う文化背景の人間と接する際に、自分の中にある「集団の文化」の影響を自覚化することによって、自己を相対的に捉えなおすこと、自分の中にある認識を他者との関係において再認識することが、他者も自己もより鮮明に理解できるようになることにつながるのではないだろうか。

このように、ことばと文化は、コミュニケーションの場において統合された形で現れる。コミュニケーションを行うのは個人であるから、表象に現れる言語はパロールであり、文化は「個の文化」である。言語習得は他者のパロールを通じて行われる。このパロールはけして、ラングに従属しているだけのものではない。他者とのコミュニケーションを通じてラングとの往還関係を結ぶパロールを自らのうちに構築していくことが言語習得には必要であろう。そのとき獲得したパロールは、その目標言語のラング、さらに、学習者の母語のラングを突き動かすエネルギーを持っている。

また他者の「個の文化」に触れることにより、「個の文化」を形成している「集団文化」からの影響に自覚的になることによって、よりいっそう他者と自己を理解することに通じるであろうと考えられる。

すなわち言語習得は自らの内にある言語文化を外側へ広げていくというベクトルと、それによる内にある自己を形成していた言語文化の再認識という内向きのベクトル、二つのベクトルを持ち合わせているのである。

5 . 結論

以上、ラングとパロール、「集団の文化」と「個の文化」は相互の存在を保証するために必要であり、同時に相互を変化させ流動的なものしているというパラドクスを見た。また、個人が他者とコミュニケーションをする場において、言語と文化は統合されると述べてきた。この「統合される」という表現はいささか矛盾を含む。なぜなら、言語と文化は共起するものだ、切り離せないものだとは私は述べたからだ。言語と文化はもと

も一つの存在である。精神活動，認識を「文化」と呼ぶのなら，人はことばなくしては，認識しえないし，ことばを話すということは何かを認識することだからだ。だからこのように言い換えるほうが妥当かもしれない。コミュニケーションの場において，言語文化は統合された形で表出する。つまり，言語文化とはコミュニケーションそのものなのである。

そして，言語教育がコミュニケーション能力を育てるものであるとするならば，それは個人の言語文化を育てるものである。つまり，パロール，「個の文化」を他者とのコミュニケーションを通じて養うことこそが言語教育であるといえるだろう。そして，新しい言語文化を獲得することにより，自分の「個の文化」がいかに形作られたかに対する内省の目も生まれる。こうして獲得された新たなラングは，その学習言語のラングを，さらに学習者の母語のラングをも変容させていく。同様にこうして形成された新しい「個の文化」は「集団の文化」との往還関係において，学習言語のもつ「集団の文化」と自分の属する「集団の文化」の両方に変容を迫る。このように言語教育がパロール，「個の文化」に焦点を当てつつ，その先に新しいラングの形，「集団の文化」の形を覗かせているのである。

参考文献

- 竹田青嗣 1994 『ニーチェ入門』ちくま新書
田中克彦 1981 『ことばと国家』岩波新書
細川英雄 1999 『日本語教育と日本事情』明石書店
細川英雄 2002 『日本語教育は何をめざすか』明石書店
丸山圭三郎 1984 『文化のフェティシズム』勁草書房
三代純平 2002 「私にとって『日本文化とは何か』」『論集ひととことば第二号』早稲田大学大学院日本語教育研究科言語文化研究室